２０２５／１０／１２　　礼拝メッセージ　　大江郷子　牧師

主　　題：救いの本質と目的－補足と適用①－
聖書箇所：随所

昨年、私は３回にわたって、「救いの本質と目的」というタイトルで、エペソ２：１－１０までのメッセージをさせていただきました。内容が濃いので３回ではとても難しいと思っていましたが、昨年は３回に収めるようにとのことでした。今年に入ってメッセージの機会が与えられたので、「救いの本質と目的」についての補足と適用をお話ししようと思ったのです。きょうは去年語ったエペソ２：１－１０のメッセージを復習のような形で語らせていただき、１１月２３日まで７回にわたって、私がメッセージすることになっています。最初は６回という予定だったのですが、メッセージを作っている中にあって、随分長くなってしまったので７回にしてもらって、２：１－１０からイントロとしてお話ししようと思っていた分のイントロのイントロをきょうはお話ししようと思います。イントロのイントロですが、私たちクリスチャンにとってはとても大切な、ある意味非常に壮大で、偉大なテーマをきょうは皆さんと共有して、これからのメッセージに移っていきたいと思います。レジメを作っていただきましたけれども、私はあまりレジメを見ながらメッセージをするのは得意ではないので、飛んでいたら許してくださいね。

◎救いの本質

１．救いの本質は、天国に行くことではない

では救いの本質と目的です。救いとは何かということです。レジメの一つ目の空欄を埋めると救いは天国に行くことではないというのがアウトラインの一つです。去年皆さんにこのような質問をさせていただいたのを覚えておられますか？聖書的ではないですか、仮に苦しみのある天国と苦しみのない地獄がもしあったら、皆さんはどちらに行きたいですかと。もし天国が水晶のように輝くものではなくて、苦しみも悲しみもあって、痛みもあって、時には暑く、時には凍えるように寒いのがもし天国だったとしたらそのような天国に行きたいですかと。たとえばもし地獄が火と硫黄の燃える池とは何のその、実はとても穏やかな気候で、ずっと短パンとＴシャツで過ごすことができて、手を伸ばせばすぐそこに冷たい飲み物があり、新鮮なフルーツがふんだんにあり、痛みも苦しみもなく、暑さもないようなところであったら、皆さんはどうですか？苦しみのない地獄と苦しみのある天国とどちらに行きたいですかと質問したのを覚えていますか？

天国と地獄の違いはたった一つです。もし苦しみがあったとしても、天国には私たちのために十字架に架かって死んでくださったイエス・キリストがおられます。しかし地獄にはおられません。地獄は神との永遠の断絶です。私たちをいっしょに地獄に導こうとしているサタンはいます。彼の唯一の願いは、私たちが神様に目を背けて、背を向けることです。ですからそれ以外のことはすべて許される地獄で、私たちが生きたいように生き、食べたいものを食べ、飲みたいものを飲み、寝たい時に寝て、起きたい時に起きて、何の苦しみもない、サタンに気を使う必要もない、ただ神様に背を向けていれば十分。

もし私たちが毎日のクリスチャン生活の中で、聖書を読まず、お祈りもせず、日曜日の朝、埃まみれの聖書をパンパンと叩いて礼拝に来るようであれば、もしかしたら仮に天国に行けたとしても、そういう人が天国に行けるかどうか置いといてですね、仮に天国に行けたとしても、その人にとっては、ある意味天国は地獄みたいなものです。なぜなら天国に行ったら、モチベーションが上がらない、全然やりたくないことをずっとやらなければならないからです。ずっと神様を賛美して、神のみことばに耳を傾けなければならないからです。永遠です、終わりがないのです。だれかと恋をして結婚することもないのです。天国ですることはずっと神様を賛美することだけです。そうすると、この地上でそれを喜びとしていなかったら、その人にとって天国は全然楽しくないですよね。したがって私たちの救いの本質は、天に行くことではないということです。

２．救いの本質は、熱心な信仰生活を送ることではない

二つ目のアウトラインとしては、私たちの救いの本質は、熱心な信仰生活を送ることではありません。では、祈って、みことばを読んで、一生懸命伝道して、礼拝していればいいのですねと思われる方もいるかもしれません。しかし、それが救いの本質ではありません。私自身が非常にそのことについて苦しみました。私はいつも自分が救われているのか、救いの確信についてずっと悩んでいました。皆さんは私にどのようなイメージを持っておられるか知りませんけれども、小学校、中学校の時、私は真面目だったのです。牧師の子どもとして生まれて、一生懸命していました。今思い出せば少し異常なくらいです。

“字のない本”というものがあって、それをいつもブローチにぶら下げて、学校に行っていたのです。皆さんは“字のない本”をご存じですよね。本当に字がない本です。表紙が緑色で、パッと開けると全部が黒です。色だけでストーリーを表すのです。次開けたら赤、次開けたら真っ白、次開けたら黄色で表紙が緑です。ご存じのように、真っ黒は私たちの罪を表し、次開けて赤はイエス・キリストの血潮を表し、そして次開けたら私たちの罪を赦され、そして開けたら黄色で天国を表して、表紙の緑は永遠のいのちです。それでいつも伝道していました。友だちも教会に連れて来たし、友だちだけではなくて、友だちの親や大人も小学校の時から伝道して礼拝に連れて来ていました。ですから私が小学校の時は小学生クラスがいっぱいでした。私が中学生になったら中学生クラスがいっぱいだったのです。

私の父親は牧師でした。教会は学校区内にあったので、私が朝行く時に父親がトラクト配布に来ていました。玄関に入ったら私の靴の中、教室に上がったら机の中がトラクトでいっぱいでした。先輩が私の顔をわざわざ見に来て呼び出して、目の前で父親の配っているトラクトを破って、右の頬をパーンと叩いて、「左も出せ」と左の頬も叩かれました。右の頬を打たれたら、左を出しなさいと聖書にありますが、クリスチャンではないのにそういうことだけは知っているのです。そのようなことは、１回や２回の話ではないです。日曜日は礼拝を守るために、運動会や文化祭は休んでいました。私はクラスで一番背が高かったので、運動会の入場行進の時、私は先頭だったのです。ところが本番にいないので、どうしてそのような迷惑をかけるのだと一度クラスで突き上げに遭ったことがあります。教師に一番前に立たされて、「説明するように」と言われて、教師が横に座って笑いながら「お前ら言いたいことを言え」みたいな感じで見ていました。みながバッと手を挙げて「どうして日曜日の運動会を休むのですか」、「日曜日には礼拝があるので」と答えると、「どうして日曜日なのですか、日曜日でないとダメなのですか」と聞かれるのです。私は「イエス・キリストが十字架で死なれて、３日後によみがえったのが日曜日なので、それを記念して私たちは日曜日に礼拝をするのです」と答えていました。自分で言うのもなんですが、小学生でそのように説明するのは偉いでしょう。「死人がよみがえったって、本気で信じているのはバカじゃないですか」とか、そういうことをブワーと言われるわけです。小学５年生だったので、だんだん孤独感に苛まれて、別に孤独感は感じなくてもいいのに泣き出して、それで教師がもういいと言っていました。

しかし、そういうことがあってもきちんと“字のない本”をぶら下げていました。絶対「それ何？」と聞かれますよね、そこから個人伝道を始めるような子どもだったのです。日曜日には、奉仕もきちんとしていました。教会で毎週日曜日、朝早く叩き起こされて、うちの父は厳しくスパルタだったので叩き起こされて、普段私たちが住んでいるところが礼拝堂になるので、ふすまを取り外して大きい広間を作って、パイプ椅子を並べて、講壇をセットしていました。私の仕事は、トイレ掃除と玄関掃除でした。それから受付のテーブルを用意して、その上に聖書と賛美歌や聖歌を揃えるのが私の役目だったので毎週していました。父親が個人訪問で近所を回る時、父親といっしょについて行きました。私は父親といっしょについて行くことがそれほど嫌ではなかったですけれども、父親がどういう目に遭うのかを目の前で見ていました。新潟の田舎でしたから、罵倒されたりするわけです。父親が目の前でそういうことをされるのを見て、神様の伝道のためにやっているのだと思っていました。

しかし、私はそのような日々を送っていても、親の前できちんと神様を信じると告白していますが、自分は救われている確信がなかったのです。なぜだろうと思うのですけれども、義務かもしれない、父親のことを非常に尊敬はしていたので、新潟の小さい教会でしたから父親と母親、私も働いていました。そうしないと家族はやっていけなかったので。朝早く起きたら父親は聖書を勉強していて、仕事に行き、帰って来て私が寝る頃にはまた勉強していました。父親を尊敬していたからサポートしたかったという気持ちもあるかもしれない。しかし、いつも自分の救いの確信を求めていました。つまり、自分が神様とともに歩んでいるという確信がなかったのです。今の日本の教会にも多いかもしれない。特に教会生活が長くなってくると、アメリカだともっと多いと思います。

３．救いの本質は、「神を知り、神に知られることである」

それでは救いの本質とは何だろうか、何をもって私たちは救われていると言うのだろうか。ヨハネ３：１６に「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」と書かれています。「**永遠のいのち**」とは何ですかと聞かれたら、ヨハネ１７：３をぜひ思い出していただきたい。これは“主の祈り”です。主イエス・キリストが十字架にかかられる前に、父なる神様に祈られた主イエス・キリストの祈りです。そこで主は何て祈っておられるのでしょうか。ヨハネ１７：３に書かれています。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストを知ることです。**」と。これが「**永遠のいのち**」に対する主ご自身の定義です。父なる神と父なる神に遣わされたイエス・キリストを知ることです。この「**知る**」というのは、ご存じのように単なる情報として、父なる神様について知るとか、イエス・キリストについて知るという意味ではないです。神ご自身を「**知る**」ということです。この「**知る**」というのは情報で知るということもありますけれども、それプラス経験を通して「**知る**」ことも含まれているのです。ヨハネ１０：１４にこのように書いています。「**わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。**」と。救いは私たちが神を「**知る**」だけではなく、神も私たちを個人的に知ってくださるということです。ですから“救いの本質”は何かというと、私たちが神を知り、神が私たちを知ってくださることです。

◎救いの目的

“救いの本質”が神を知り、神に知られることであるなら、“救いの目的”は何でしょうか？一言で言うと“神の栄光”です。どうしてそのように言えるのでしょうか？エペソ１章に父なる神様が私たちの救いのために何をしてくださったか、子なる神様が私たちの救いのために何をしてくださったか、聖霊なる神様が何をされたかということが書かれています。父なる神様について書かれた後に、このように書いています。エペソ１：５－６に「**:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。:6 それは、神がその愛する方にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。**」と。主イエス・キリストに関してはどうでしょう。１１－１２節に「:11 **この方にあって私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな行う方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです**」と書かれています。聖霊に関してはどうでしょう。１４節「**聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保障ですこれは神の民の贖いのためであり神の栄光が褒めたたられたのです**」と書かれています。救いの目的は“神の栄光”です。

４．神を知ることは神と個人的な関係を持つことである

では、私たちが神を知る、神に知られることを考える時に、どうしても頭から離れない人物がいます。だれだと思われますか？イスカリオテのユダです。彼は救われていませんでした。しかし、イスカリオテのユダの置かれている状況を想像してみてください。このメッセージをするにあたり、イスカリオテの

ユダについていろいろと調べたのですが、彼は十二弟子のひとりでした。金も持たずに御国を宣べ伝えるために、キリストによって派遣されましたよね。その時十二弟子以外にも７０人も遣わされていました。ですから十二弟子は本当にエリート中のエリートでした。主イエス・キリストのそばにずっといた人物ですよね。しかも、イスカリオテのユダは表向きには良い人で、人々から非常に信頼されていました。彼は弟子たちの財布を預かっていました。金銭の管理を任されていました。彼は主イエスの公生涯の３年半、２４時間、毎日、主イエスとともにいたのです。文字どおり、イエス・キリストと寝食をともにしたのです。イエス・キリストはイスカリオテのユダをもちろん知っていました。イスカリオテのユダはイエス・キリストをもちろん知っていました。しかし、彼は救われていませんでした。ことばを交わしましたか、もちろんイエス様といっしょに食事をして、イエス様といっしょに寝て、イエス様といっしょに旅して、私たちクリスチャンにとっては憧れの生活を彼は３年半したのに、彼はイエス・キリストがだれかを最後まで知らなかったのです。そればかりかイエス・キリストを裏切る、裏切り者でした。

▸裏切る

新約聖書の中に裏切り者のユダと言っていろいろ出てきますが、この「裏切る」という単語は、「売り渡す」という意味が入っていることば、つまりイエス・キリストを彼は裏切って売り渡したのです。どうして彼はイエス・キリストを裏切ったのでしょうか。もしかしたら彼自身の方がイエス・キリストに裏切られたと思っていたのかもしれない。彼がイエス・キリストに具体的に何を求めていたのか聖書には書いていません。しかし、イエス・キリストをイスラエルの王として迎える時に、ローマ帝国からの解放を彼がリードしてくれることを願っていたかもしれない。十二弟子だったので側近中の側近でした。イスカリオテのユダの名声、栄誉、権力、権威も、もしかしたらそれに伴う富までも彼はイエス・キリストを通して手に入れられると思ったかもしれない。それは物の見事に裏切られました。その時にイスカリオテのユダはイエス・キリストを裏切り、売り渡したのです。

少し補足を加えると、それは、預言者ダビデの預言が成就するためでもありました。ダビデの詩篇４１：９にこのように記されています。「**私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。**」と。まさしくイスカリオテのユダはイエス・キリストと親しい関係だったのです。とても良い人だったのです。ですから最後の晩餐の時、イエス・キリストがこの中に裏切り者がいると言った時に、だれもイスカリオテのユダを疑いませんでした。最後の晩餐の時に彼が裏切り者だと知っていたのは、イエス・キリストとイエス・キリストから直接聞いたヨハネとそしてユダ本人だけだったのです。まさしくこの預言が成就する一つの条件は、ヨハネが「だれですか」とイエスに聞いた時に、「私がパンを浸して渡す者です」と出てきます。そして、イエス・キリストはイスカリオテのユダにパンを渡し、その瞬間にヨハネは彼が裏切り者だとわかったのです。しかし、イエスがイスカリオテのユダに「**あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。**」と言って、イスカリオテのユダが立ち上がってその部屋を出て行こうとした時に、みなはどのように思っていましたか？会計係だからイエス様に買い物をするように言われて、買い物に行くのだろうと思っていたくらいです、裏切り者の話をしているのに。それだけ表向きは良い人でした。信頼されていたのです。

その「**親しい友**」であった彼がイエス・キリストを裏切ります。マタイの福音書２６章、最後の晩餐が終わってイエス・キリストが、ゲッセマネの園に行かれた時にイスカリオテのユダは兵士たちを伴ってゲッセマネの園に案内します。イスカリオテのユダはイエス・キリストの行動パターンまで知っていたのです。この後イエス・キリストがどこに行くかをイスカリオテのユダは知っていて、そこに兵士たちを導いていくのです。当時は過ぎ越しの祭りでしたから、エルサレムには人がいっぱいでした。その時イエス・キリストは人気があったので、たとえ兵士であってもイエス・キリストを公然と捕まえようとしたら暴動が起きることは必至でした。ですから人々の目に留まらない形でイエス・キリストを捕まえたかっ

たからイスカリオテのユダを利用したのです。彼はイエス・キリストの行動パターンまで知っていたから、イスカリオテのユダはゲッセマネの園まで彼らを案内するのです。

▸口づけ

マタイ２６：４８に「**イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言っておいた。**」と書かれています。当時の世界では敬意と愛情を示す表現です。イスカリオテのユダは、敬意と愛情を示す口づけをもって、イエス・キリストを裏切ったのです。当時、教師の側から生徒に向けて腕を広げて口づけをしに行くのは大丈夫だったのですが、教師に向かって生徒が自分から口づけをすることは、失礼に当たるのでご法度でした。ところがイスカリオテのユダは自分からイエス・キリストに口づけをしに行きます。しかも最後の晩餐の頃でしょう。この頃はペテロ、ヨハネ、ピリポもみな、主イエス・キリストのことを「主」と呼んでいたのです。彼らは主イエス・キリストが何者かわかっていました。主イエス・キリストは神であり、私たちは彼を通して父なる神を知ることも知っていました。しかし、イスカリオテのユダは最後までイエス・キリストを「ラビ」と呼んでいました。マタイ２６：４９に「**それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。**（ラビですよね）**お元気で」と言って、口づけした。**」と記されています。４８節の口づけと４９節の口づけとは単語が違うのです。もともと同じ単語ですが、４８節の口づけを強調する意味で、４９節の単語が使われています。つまり日本語で訳すならば「熱烈な口づけ」と言うのですかね。

ほかのところでどのように使われているかと言うと、ルカの福音書１５章の放蕩息子のところで、１５：２０でこのように書かれています。「**こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。**」と。ここに４９節の熱烈な口づけの単語が使われています。父親の愛の表現ですよね。ほかにもたとえば使徒の働き２０章は、パウロがエルサレムに行く時にエペソの長老たちと会うために、彼らをミレトに呼び出しました。そこでエペソの長老たちと会ったのです。彼はエペソで長老たちと時間をともに過ごし、「**昼も夜も涙とともに**彼らを**訓誡し**、」導いたとあります。１９節に「**私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、……**」とありました。２０節に「**益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え**、」と記されています。彼はそのようにエペソの教会の人たちを愛し、エペソの教会の長老たちもパウロを愛しました。そのような中にあって、最後の別れの時が２０：３７－３８にこのように記されています。「**:37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、:38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。**」と。長老の男性たちみなが「**パウロの首に抱**きついて、**幾度も口づけし**」た。これも４９節と同じ熱烈な口づけです。イスカリオテのユダはこの熱烈な口づけをして、イエス・キリストを裏切ったのです。そして彼は最後までそれを悔い改めなかった。

マタイ７：２１－２３に「**:21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』**」と記されています。イスカリオテのユダといっしょです。彼はイエス・キリストに遣わされて、御国を宣べ伝えるために出て行きました。イスカリオテのユダは、主の名によって悪霊も追い出し、預言し、病を癒した。ここに出てくる人物もそうです。彼は別に自分の名前でそれをしたのではなく、主の名前で行いました。しかも１回や２回ではなく、彼らは主の名によって、多くのさまざまな働きをしたのです。しかし、主イエス・キリストがここで言われていることは「**わたしはあなたがたを全然知らない。**」です。知らないわけがないですよね。同じことをマタイ１０：３０で見ると「**また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。**」とあります。ですから

神は私たちの髪の毛の数すらも知っておられるのです。したがって、「**『主よ、主よ』と言う者**」について神が知らないわけがないのです。

しかし、神はここで言われた「**全然知らない**」とはどのような意味でしょうか。あなたとは全く関係がありません。あなたについて知っているけれども、あなたとは全く関係がない。「**不法をなす者**」と、イスカリオテのユダといっしょです。彼はイエス・キリストとずっとともにいたのにイエス・キリストはだれかも知らず、知ることもなく、そして預かっていたお金をこっそり盗んでいた盗人だったのです。ですから彼はマルタとマリアのマリアがイエス・キリストの埋葬の準備のために、イエス・キリストの足に高価な香油を塗った時に何と言いましたか？そのお金があれば貧しい人に施しができたのにと。しかし、彼はそのお金が欲しかったのです。自分のポケットに入れたかっただけです。それどころか、そのことを通してイエス・キリストさえ批判しました。どうしてあなたはこのような高価な油が足に塗られて、それを受けているのですかと。あなたがそれをストップして、売れば貧しい人に施してきるではないですかと。イエス・キリストさえも批判した者に対して、神は全く知らない、全く関係ない、あなたは「**不法をなす者**」だと。これは私たちの以前の姿ですよね。私たちも「**神を神とあがめず、感謝もせず**」歩んでいたのです。驚くべきことは、アダムが罪を犯して、神に背を向けて神との関係が断絶した時に、神様は何をしてくださったのかと言うと、神様ご自身が私たちとの関係を回復されようと、ひとり子であるイエス・キリストを送り、イエス・キリストを十字架にかけ、私たちの罪を贖い、私たちとの関係を回復しようとされた、それが救いなのです。

私たちに良かれと思って、私たちを天国に導くために、イエス様は十字架に架かって死なれたわけではないですか。驚くことは、神が私たちを知ろうとして、関係を回復するために十字架にかかって死なれた、それが“救いの本質”です。ならば、もし私たちがクリスチャンと言っていながら、神と個人的な関係がないならば、神について知っていたとしても、どれだけ賛美をささげ、祈り、聖書を読み、礼拝に来ていたとしても、神ご自身と関係がなければ私たちは自分の救いについて、吟味しなければならないのです。なぜならそのために私たちは救われたのです。そして、そのことを通して神の栄光を現すために私たちは救われたのです。神様を知るということは神との個人的な関係です。

５．神と個人的関係を持つとは、どういうことか

では、個人的な関係を私たちが持つとはどのような意味でしょうか？聖書を読むことも、祈ることも、賛美することも、礼拝することも私たちの“救いの本質”ではないと考えると、少し不安になってきませんか？。誤解してほしくないのは、それが良いと言っているのではないです。もし救われた者がいるならば、必ずみことばを読みます。もし救われている者がいるならば、必ず祈ります。救われている者は礼拝します。しかし、みことばを読み、礼拝し、祈っているからといって、個人的に関係がなければ、その人が救われている証拠にはならないということです。では何をもって神と個人的関係を持っていると言えるのでしょうか。

そのことについて、詩篇１６を見ていきたいと思います。主イエス・キリストの復活について、預言者ダビデが預言しているところです。

<u>詩篇１６：１－１１</u>

「:1 神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。:2 私は、【主】に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」:3 地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。:4 ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。:5【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。:7 私は助言を下さった【主】をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。:8 私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことが

ない。:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」

なぜこの詩編は、ダビデが神を個人的に知っていることのあかしになるのでしょう。たとえば９節に「**それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。**」と書かれています。たとえば１１節に「……**あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。**」と書かれています。彼は神にのみ喜びと楽しみと満足を見いだしていたということです。この当時のダビデの状況を思い出してみてください。１６篇は、ダビデが追われている身の時の話です。だれに追われているのかはわかっていません。サウル王なのか、アブシャロムの時なのかわかっていません。しかし、彼がいのちを狙われ、荒野をさまよい歩いていた時の詩篇です。彼に食べ物は十分ありましたか、ない時もありました。彼はいつもいのちの危険にさらされていました。寝るところは時にはほら穴でした。王なのにベッドに寝ることはできず、ほら穴に寝ていたいのです。彼をあざける者が出てきました。「ああ彼の罪の結果で、もう彼に救いはない」と。彼のことを「アハハ」と笑う者がいた。彼をあざけり、環境においても、身体的にも、心においても彼は決して人々が望むような状況ではなかった。

しかし、彼はどのような関係を神と結んでいたかが１６：１に書かれています。「**神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。**」と。そのような状況の中にあってダビデが行ったことは、神に身を避けていたのです。神と個人的な関係のゆえに、神を見つめていたのです。彼は決して状況を見ないようにしていたのではなく、見たら辛くなるから見るのをやめようと言っていたのではないです。彼はその状況に身を置いていたのです。自分の置かれている状況を知っていたのです。しかし、彼は神に身を避けていたのです。「**私は、【主】に申し上げました。「あなたこそ、私の主。……**」と。あなたこそ私の主人です、私はあなたの奴隷です。ギリシャ語で奴隷のことを“デューロス”ということばが使われています。ヘブル語で“エベド”と言います。旧約にもいっぱい出てきます。エジプトの時に、イスラエルの民は奴隷だったでしょう。そこから彼らは救い出されて主の奴隷になったのです。それが出エジプトのメインテーマです。ですからダビデは知っていたのです。私は奴隷です、私の主人は神、あなただけですと。私の幸いは、あなた以外にありません、なぜならあなたは神だから、理由はただ一つあなたは私の神だからです。

５節に「**【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。**」と記されています。何を言われているかというと民数記１８：２０にこのように書かれています。「**【主】はまたアロンに仰せられた。「あなたは彼らの国で相続地を持ってはならない。彼らのうちで何の割り当て地をも所有してはならない。イスラエル人の中にあって、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。**」と。イスラエルの民がエジプトを出て、最後４０年荒野をさまよった後、約束の地に入る時に、各部族に土地が割り当てられたのです。あなたの部族はこの土地で、あなたの部族はこの土地ですと。それがどういう意味を表すかというと、土地は生活の糧なのです。そこで畑を耕して、ぶどうの木を植えて、彼らが生きていくすべをその土地で得ていくのです。ですから土地を割り当てられたということは彼らの生活が決められたということです。あなたたちはここに家を建て、畑を耕し、作物を収穫して生きていきなさいということです。

ところが神は、レビ人には割り当ての地を与えなかったのです。その代わりレビ人に対して神は何と言ったかというと、「**彼らのうちで何の割り当て地をも所有してはならない。イスラエル人の中にあって、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。**」と言われました。すなわちレビ人に関しては神ご自身が彼らの生活を支えると約束されています。そのアイデアがダビデの１６篇の中での祈りに反映されています。１６：５「**【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。**」と記されています。あなたが私を養ってくださるのですよね、私はほかのだれに

も拠り頼みません、なぜならあなたが養ってくださるのでしょうと。あなたは神だから、私はあなたのことを知っているからと。もう一度、ダビデの置かれている状況を考えてください。荒野でさまよっていたのです。

また「**私への杯です**」とは運命を表します。生きるにしても死ぬにしても、神の御手のうちに私はあると。その神に彼は信頼していた。６節に「**測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。**」と書かれています。測り綱は、相続地を決める時に土地を測量する器械を表します。メジャーです。「**私の好む所に落ちた**」とは、ダビデが良いと思う相続地に器械が落ちた、つまり満足したということです。何を言っているかというと、ダビデの相続地は神ご自身だったでしょう？ですからダビデは神ご自身に満足を見出していると言うのです。あのような状況の中にあって、ダビデは神ご自身に満足を見いだしたのです。だから彼は「**夜になると、私の心が私に教える。私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。**」と。不思議なダビデらしい表現ですよね。前にいながらも右にいる神、遍在の神、ダビデは神に囲まれていた、神のうちにいたのだと。「**私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう**」彼は心だけでなくからだの安らぎも覚えていたのです。「**まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。**」、これは、イエス・キリストの復活の預言です。「**あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。**」。

つまり神を知っているということは、神がどういう方かを知っているということです。本当に神がどういう方かを知っている者は、神にのみ拠り頼むということです。神のみに喜びを見出すということです。ところが世の多くの人々は違うでしょう。自分の人生すべてをささげて、大金を得るとか、社会的な地位を求めるとか、自己承認欲求とか自己実現とか、すべて自分が中心です。イスカリオテのユダも結局は自分が望んでいることをイエス・キリストが満たしてくれなかったからこそ、イエス・キリストを裏切ったのです。イスカリオテのユダにとって本当の神は自分自身だったのです。

しかし、神を本当に知っている者は、神にのみ信頼を置く。そのことは、私たちが神の栄光を現すことになるのです。たとえば、自分の子どもが私はお父さんといっしょにいたいと、私はお父さんのことを頼りにしているのと、きょういっしょに食事したいと、もし子どもがそれを言ってきた時に、親としてどのように思いますか？「勝手なやつだな、こっちは忙しいのに」とは思いませんよね。子どもたちが自分に信頼を寄せていることは、神にとっては喜びではないですか。神がどんなにすばらしい方かということを表すではないですか。ですから私たちが神にのみ信頼を寄せる時、それは神の栄光を現すことになるのです。私たちが神を知り、神にのみ信頼をする時に、それが神の栄光を現すことになるのです。ですから神は私たちを見て喜んでくださるのです。神様は私たちを通して栄光を現そうとされるのです。それが、私たちが神を知ることであり、神が私たちを知ってくださることになるのです。そのために救われ、私たちはそのために生きることによって、神の栄光を現すのです。でも世の中の人は、全くつまらないちりあくたに目を留めて、それが自分の喜びであると勘違いしている。そしてそのために自分の人生をささげている。もっと大きな喜びが私たちの上にあるのに、それを見ることすらできない。私たちはどちらでしょうか？

旧約聖書の中でイスラエルの民は、何回も何回も神に文句を言います。あれを読んでいるのが本当につらいです。その姿が自分の中にもあることを正直に認めます。大きな喜びや満足を目の前にしながら、過去のものに目を留めようとすること、エジプトでは肉を食べられたのにとか、こんな喜びがあったのにとか。神はこれらを私から奪って、いったい私たちをどうしようとされるのですかと。私たちがこんな荒野で死ぬために、あなたは私たちをエジプトから連れ出したのですかと。イスラエルの民は、ちりあくたに目を留めて、何て大きいものを私たちに与えらようとされているのだということをダビデのように見ることができなかった。私たちは救われている者として、どちらに目を向けていますか？ピリピ３：８

でパウロが同じようなことをあかししています。「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。……**」と。パウロはイエス・キリストを知っていることのゆえにすべてのものをちりあくたと思っていた。そんなものから満足を得ることはないとわかっていた。満足はキリストのみ、主からのみ来ると。しかし、私たちは今お話ししたように、多くの環境の中に目を投じる時、時には神のみを見ることに困難を覚えたりすることがあります。しかし、その中にあって私たちが神を見つめ続けることは、私たちはそれを通して神の栄光を現すことになります。私たちが本当に神を知っていることのあかしになります。

私の娘が病気だった時に、今でも病気ですが、おかげさまで随分ましになりましたけれども、最初は、どのような病気かもわからず、原因もわからず痛み止めも効かず、その中にあって私たちにとって何がチャレンジだったかというと、彼女の痛みが繰り返されてきたことです。すごい痛みでした、夜中に大声を出して暴れ回るのです。本人は覚えていないですけれどもね。近所の人たちが起きてくるのではないかと思うぐらい、家族の者が飛び上がるぐらい大きなうなり声を上げて、痛みのゆえに暴れるのです。学校の広い保健室でも、先生たちが飛んで来るぐらいの大きな声でうなり声を上げて暴れるのです。そのような中にあって、「神様を信頼して、いっしょにやっていこう」と、家族みなで祈って、神様に信頼を置きます。ある時思わぬところで薬が効いたりして、彼女の痛みがましになるのです。「良かったね、神様が祈りを聞いてくださったね、感謝だね、神様に賛美しようね」と。ところがわずか数日の間に、またその薬が効かなくなって、物すごい痛みが襲ってきます。あるお医者様は、精神的なものから来るのではないですかと言いましたが、私たち親はそれを見て違うとわかっていました。本当に痛いのだろうとわかりました。なぜなら顔が痛みで蝋人形みたいに真っ白になって、能面のように表情がなくなっていたからです。つい昨日、「良かったね、神様に感謝しようね」と言いながら、翌朝、私が車で迎えに行ったら、痛みで廊下の上で転がってうめいているのです。そして、また一週間、二週間とみなで戦いながら祈って、そして祈りが聞かれると「神様、感謝だね」と。ところがまた二、三日したら同じことの繰り返しです。その状況だけを見ていると、どんどん、どんどん心が削がれていくのです。どうして神様はそのようなことをされるのだろうと。私も神様に文句を言いました。「神様、どうして彼女にこんなことをされるのですか、お気に召さないなら私を打ってください」と。親だったらそうに思うではないですか。神様が最善だ、神様がすべてのことをなされると知っていました。しかし、そのような状況を親が見て、「神様、最善だね、ハレルヤ」と言えるわけがないでしょう。

そして、そういうことが何回も何回も繰り返されてきた中にあって、私は夜、散歩しながら祈っているのですが、だんだんと泣きながら祈るようになっていました。そんな祈りの中、神様は私に何をしてくださるかと言うと、私の頭の中にある神様に対する知識を総動員して、私の目を神様の方に向けてくださるのです。私が神様によって取り扱われた経験を総動員して、神様は何者かということを私に思い出させてくださるのです。そうだった、神様は主権者だ、神様はすべてを支配される権威を持っておられる方だと。神は全知全能で、すべてのことを知っておられるだけではなく、何が最善かまで神様は知っておられる、それが全知という意味でしょう？神様は全能です。神様は治すことができないのではない、治すことができます。そして、神様は、今まで私に対して何をしてくださったか、このような私に目を留めてくださって、救ってくださって、神を知る者と変えてくださった。私の人生で神は何一つ私に対して悪いことをされなかった。したがって、神様はこの時も最善をなしてくださる、それが神です。そして、私が彼女を愛するよりも神様が彼女のことをもっと愛しておられる。そして、私が知っていることは、神様はすべてを知って、神の栄光を現そうとされていることです。神様は私の主人だった、私は神の奴隷に過ぎない。私が心の中で何を考えるのか、どのような計画を持つのか、私がどういうことを期待するのか、どのような夢を持つのか、そのすべては神のものだ。それから外れたからといって、私の思いどおりにならな

かったからといって、神が神であるがゆえに、私が神に対して文句を言う権利は一つもない。そうやって神様に祈っている時に、神様がどんどん、どんどんそのことを通して、私に平安を与えてくださる。祈って歩いていた時に最後には神様は私の心に賛美を与えてくださって、感謝を持って家路につくのです。

私たちはたとえば人と比べる時によく文句を言うではないですか。教会の中で同じクリスチャン同士を見て、あの人は夫婦ともクリスチャンなのに私は違うとか、あそこの子どもは救われているのにうちの子どもはとか、あそこの子どもは元気なのに、うちの子どもは病気でとか、あそこは豊かなのにうちは貧しくてと。神はすべてのことを最善でご存じで、それぞれひとりひとりを通して神の栄光を現そうとされているのです。そのためにあなたは救われたわけです。ひとりひとりに神様が最善なプランを用意されているのです。私たちがしなければならないことは、ただ神を見上げて、神に満足を求め、喜びを見いだし、そのことを通して私たちが神の栄光を現す者に変えられたということに感謝して、神を見つめて歩むことです。それが神を知っている者の姿です。

私たちは神を知るために造られたわけですよね。神の栄光をほめたたえるために造られました。私たちは神を知るために救われ、神の栄光をほめたたえるために救われた。そして私たちは今、神を知り、神の栄光を現すために生きている。神様は私たちを愛してくださって、いのちをささげてくださったとても良い方です。イスカリオテのユダがイエス・キリストを裏切る時に、最後の晩餐でイエス・キリストは弟子たちの足を洗いました。イスカリオテのユダの足も洗いました。イスカリオテのユダが兵士を連れて、ゲッセマネの園に来て、「先生」と言って熱烈な口づけをした時に、主はユダに「友よ」と言われました。私たちの神はそのような神です。私たちはその神様を知り、神のみに満足を見いだし、神の栄光を現すために私たちは生きているのです。ですから愛する兄弟姉妹、私たちは神から目をそらせてはいけません。神から目を離してはいけない。神以外のものに目を留めてはいけない。私たちが見るべきはただおひとり、神のみです。